

イエスのことば 第 57 回

イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」(ルカ 10 : 28)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避(リトリート)と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. リトリートから帰ってきた後、紀元 29 年秋 10 月の仮庵の祭りから冬 12 月の宮きよめの祭りまで、約 3 か月の間に起きた出来事(十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月)
 - (1) 仮庵の祭りの前(ヨハネ 7 : 2~10、ルカ 9 : 51~56、マタイ 8 : 19~22)
 - (2) 仮庵の祭りにおいて 指導者層との衝突
 - ① 仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】(ヨハネ 7 : 11~52)
 - ② 仮庵の祭りの期間中の個別的な衝突(ヨハネ 7 : 53~10 : 21)
律法をめぐり、光をめぐり、メシアの神性をめぐり、
生まれながらの盲人の癒やしをめぐり、「羊飼ひ」(メシア預言)をめぐり
 - (3) 仮庵の祭りの後(ルカ 10 : 1~13 : 21)
 - ① 七十人の派遣(10 : 1~24)
 - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」(10 : 25~37)
 - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて(10 : 38~42)
 - ④ 祈りについての教え(11 : 1~13)
 - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し(11 : 14~36)
 - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について(11 : 37~54)
 - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え(12 : 1~13 : 21)
 - (4) 宮きよめの祭りにおいて(ヨハネ 10 : 22~39)

ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」

□アウトライン

- A) 律法学者の質問(ルカ 10 : 25~27)
- B) イエスの答えと律法学者のとまどい(ルカ 10 : 28~29)
- C) 良きサマリア人のたとえ話(ルカ 10 : 30~37)

A) 律法学者の質問（ルカ 10：25～27）

25 節 さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。

何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」

- 永遠のいのち・・・旧約聖書のダニエル書に次のように預言されていた
ダニ 12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。
ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌惡に。
- 何をしたら・・・この質問は、ギリシア語原文の時制により意味する内容を忠実に日本語に翻訳すると、次のようになる。
「一回限りでこれさえすれば、永遠のいのちを受け継ぐことができる、といえるのは、何ですか？」
- 律法学者の誤りは・・・何か「一回限りの行い」で永遠のいのちを得られると考えたところに誤りがある。
- そもそも、永遠のいのちは、神の恵みにより、信仰を通して、受け取るものである。もし、行いによって得ようとするなら、その人は生涯に渡り毎日、完全に律法を守る生活をしなければならない。
- 普通の人には、それは不可能である。人はどんなに正しくありたいと願っても、罪を犯す。だから、律法には、人が罪を犯したときには、自分の身代わりとして動物の犠牲をささげて、その血をもって罪をおおう、という規定が設けられていた。
- この動物の犠牲は、イエス・キリストの十字架を予め指し示すもの、予表である。したがって、イエス・キリストが十字架で死んだくださったときに、動物の犠牲は終了した。旧約聖書の律法、いわゆるモーセの律法は、十字架の時点で終わる運命にある。この質問の時点は、まだモーセの律法が生きている時代である。

26 節 イエスは彼に言われた。「律法には何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」

27 節 すると彼は答えた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

- 律法学者が行いによって永遠のいのちを受け継ぐためには何をしたらよいのか、と質問してきたので、イエスは、律法ではどのような行いをするように命じられているか、と尋ねた。質問に対して、質問を返し、相手の知っていることから議論を始めるという、指導法である。
- 律法学者は、モーセの律法の中から、2 か所を答えた。

- 申命記 6 : 5 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。→ ヨシュア 22 : 5 では、ヨシュアが律法の規定の中から特にこの箇所を引用した。
- レビ 19 : 18 あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。→ 律法の冒頭にある十戒は、前半の 4 つは神との関係、後半 6 つは他の人との関係に関する規定である。後半 6 つの規定の精神を一言で集約して言うならば、レビ 19 : 18 の中の波線部である。

B) イエスの答えと律法学者のとまどい (ルカ 10 : 28~29)

28 節 イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

- それを実行しなさい・・・この答えは、ギリシア語原文の時制により意味する内容を忠実に日本語に翻訳すると、次のようになる
「一回限りではなく、継続してずっと、それをしなさい」
- 継続してずっと、それをせよ、と言われて、律法学者は、自分が「一回限りで」と質問したことが誤りだったと、悟った。わが身を振り返れば、力を尽くして主を愛する、ということを、日々継続しては、できていない。それを自覚していたからこそ、「一回限りで」何か、を求めたのであった。
- こういう自覚があったのなら、信仰を通して神の恵みにより永遠のいのちを受け取るという正しい道に行けばよさそうだが、人はなかなか、そちらには行かない。当時のラビたちは、何か一回限りでも永遠のいのちを受ける道は？と議論を重ねていたのである。パリサイ派は、結局のところ、モーセの律法を持っているユダヤ人は皆救われる、口伝律法を守っていれば神からの称賛を受けられる、と教えていた。行いによって救いが得られるという誤りに陥っていた (参照 ロマ 9 : 32 「信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです」)

29 節 しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とはだれですか。」

- 力を尽くして主を愛するということについては負い目を感じるので、彼は二つめの規定、隣人を自分自身のように愛せよ、という方に議論を移した。律法学者たちは、隣人とは誰を指すのか、よく議論をした。「同胞のユダヤ

人」、あるいはさらに範囲を狭くして、「自分が気に入る人」といった定義をしていた。彼は、二つ目の規定についてなら、自分が正しいことを示すことはできる、日々守っていると自覚していたのである。

C) 良きサマリア人のたとえ話（ルカ 10：30～37）

30～35 節 イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行っただが、強盗に襲われた。強盗たちはその人の着ている物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行っただ。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行っただ。

ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱した。

次の日、彼はデナリ二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

36 節 この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」

37 節 a 彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」

- 「サマリア人です」とは、言いたくないという彼の思いがにじみでている。

37 節 b するとイエスは言われた。「あなたも行っただ、同じようにしなさい。」

- イエスの真意は、「永遠のいのちを受け取るために、良きサマリア人のような行いをしなさい」ではない。イエスは、律法学者たちが「隣人」について、異邦人を除外したり、自分が気に入らない人を除外したりすることの誤りを指摘している。
- イエスの真意は、「あなたができらことで、あなたの助けを必要としている人がいるなら、その人の必要に応じてあげなさい」である。

□まとめ

永遠のいのちは、人の行いによらず、神の恵みにより、信仰を通して受けるものである。

神を信じる信者のみが、神の愛に応答して、神を愛することができる。

そしてその信仰が表に現れる行為が、隣人を自分自身のように愛することである。